熊本大学学術リポジトリ

雑歌 ： 文苑

著者	扶草，基紀，山人，奇熊，蘆月，[フソウ]，[モトノリ]，[サンジン]，[キユウ]，[ロゲツ]
雑誌名	龍南會雑誌
巻	６６
ページ	６１-６３
発行年	1898-06-25
その他の言語のタイトル	雑歌 ： 文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5121

風そよく小川の岸の青柳にゆらく螢のかけの涼しさ　紐

青柳の糸より細くとふ螢見えつかくれつ影のほのめく　扶草

青柳の糸の數さへ見るはかりみきは亂れてとふ螢かな　盧月

當座探題

岡新錄　芝峯

きのふけふ夏きにけれはから衣たつたの岡はみとりとそなる

軒菖蒲　清泉

見るたひに思ひそ出つる故里の軒の菖蒲にそよく夕風

夏草滋　蘆月

里人はかりにかれともたくさ野の草は日ことにしけりゆくかな

夏眺望　奇熊

若緑しける野末に白妙の衣にかふる夏は來にけり

雜歌

雲雀　扶草

雲井より落くる野べの夕ひはり猶大空に聲のゝこれる

藤

千代かけてよはひをちきる松か枝に若紫の藤波の花

柳

長閑なる春のすかたをいとなかくたるゝ柳の色に見る哉

躑躅

茜さす夕日の影に色そひて園のきりしまてりまさるなり

苗代

苗代の水口祭ひたすらに秋のみのりをいのるはかりそ

感するところあり　基紀

蝙蝠の時を得かはにとふよかな雲井に月の影くらくして

さ月十五日鄉友會にさそふ人のありて紅葉山に物せんといへどきゝいれずしたがひゆくはどに

よめる　山人

心のみ空に通へどまかせぬは風にふかるゝ煙なりけり

曉郭公　奇熊

ほの〳〵と空あけ方の郭公半は夢になき渡りけむ

尋郭公

いつこにか行きて問はまし郭公卯月半の夕暮の空

さ月十七日亡蟻田君の追吊會に雨ふりければ

よめる　蘆月

なき人を忍ふ涙かかくもり雨そふりくる夕やみの空

旅情

錦きてかへるとも見ん故郷の夢おとろかす秋の初風

雜報

○演說會

四月廿九日午後六時例の如く演說會を端邦館裡に開く、第一席楠田義任君は、冒頭前雜誌部委員と云て充分自家の責任を盡すこと能はざりしは余の大に諸君に對して耻るところなりと謙遜せられ、次で『學校の法律』なる題の下にまづ人間に自由の必要ぶると同時に制裁の欠ぐべからざることを述べ、法律上の五個の制裁より說き起して學校の制裁に及びてこれが批評を試み、一二の古例を引きてこれを歷史的に說明ん、學校の刑罰は入學の際生徒が誓約書によりて學校と契約せるものなれば、一度校規に觸るゝ事あれば、生徒は甘んじてこれが制裁を受げざるべからずと斷じ、猶進んで古は法三條を以て天下を治めしことありしに、今日法律の頗る繁多になれるものは、果して何人の罪なるか、學校に於て校規の漸く多からんとするが如きは、彼の學校騷動なるものこれが一原因をなすことなからんやと述べて奮慨一番し、遂に學校は出來得べく刑罰を省きて道德を以て生徒を治めんことを希望すと結論す、要之氏は法律、制裁、契約、刑罰等の語を藉りて法律的に校規を解釋せんとしたるものゝ如ん第二席はフアーデル先生にして、The necessity of adapting a more rational and practical System of representing thoughts なる題をかゝげて專ら漢字の不便にして思想の傳達に害鮮らざる所以を說き、これが改善策として